チキンレトルト階層と仕上がりスペックの連動きじゃないかつこかた

ケキメニの書層性——
書籍の本文なのか、
見出しがゴシック、目次などは本文の構造を示す部分なのか。
仕上がりスペックが、
ページ物なのか、
端物（チラシ、ポスターなど）なのか。

組版はなぜ一ページ刻みではいけないのか。
うまく刻まれたページは、素敵なリラックスやメロディを呼び起こし、誘い込む。

以下に述べるのは、ある経験をさんざんしてきたあと《**書籍組版チェック項目**》である。

◆本文

(1) **天地ノドホロ寸法が一冊通して一貫しているか**

作業中にテキストを幅をつくったりつまんでしまい、移動してしまうことしばしばある。最初から最後まで、版面の位置とサイズが当初の版面設計どおりに施工できているかどうか、を章ごとに、そして最終的には全体を通して、さら返って自己点検することが基本である（ページ優先ではなく版面優先）。

(2) **ノンブルのサイズと体裁、位置が一貫しているか**

サイズと書体、左揃えか右揃えか、センターか、ページフッターか、ページ番号……

(3) **字送り値が段落最終行のみ違っていないか**

組版設計が正確でないと、段落の最終行だけ字送りがちがってしまうことがある。版に組版設計時において、端数が出た場合、版面の数値優先で、端数はページで処理するべき基本である（ページ優先ではなく版面優先）。

(4) **半角約物の連続箇所の間隔、行末調整の追出しか追込みかが一貫しているか**

行末ぶらづけの選択は、1行30字を超える場合が基本。行末がぶらづけアクなら最後までアクで。行末が半角／全角なら最後まで半角／全角で。行末が強制半角ドリなら最後まで強制半角ドリで。目先にとらわれて部分的にツメツメにするのは最悪である。

(5) **詳細字原字形字体混植の箇所があればすぐ送りスイッチ調整が一貫しているか**

和文書体とも各組みせにおいて、オイタとスイッチの調整の適切値を決め、最後まで一貫させる。また、和欧間ラ値も一貫させる。ちなみ、キキメトのなかの「半角スペース」は欧文スペースなので、和ホ（全角スペースの50%）に置換する。

(6) **段落冒頭の字下げ値が一貫しているかどうか**

段落冒頭の字下げ値は調整に使ってはなりません，当該行の用字とのようなものであろうとも一貫させる。

(7) **約物ぶらぶらこの句点の字取幅が区切りの階層に沿っているか**

一貫させる。

(8) **行頭一字孤立および頁頭一行孤立の回避**

行頭の一字孤立は、一行の字詰めがある程度以上ある場合は，調整して回避する。

(9) **ルビ文字の配置にルビをかけが一貫しているか**

中付きが一般的であるが，親文字間のアキ調整がなくてもそれ付きが研究されてよい。原稿整理時にキノイビタケルアルファルを識別しておく。

(10) **画像ごの位置関係および回り込みの方式が一貫しているか**

回り込み部分の設計では，本文の字送りを一貫させることが優先である。回り込みのこいろだけ字送りばらばらくのはまるっとしないく。まだ図版に対してキャプションのサイズ，体裁，およびの図版とのアキ幅はパロトレいこと。

(11) **小書き仮名や音引き等の扱いが適切で一貫しているか**

区切り符号は，チキメト区切りの強弱によって文章の構造を明らかにする助けを果たす。段落 > 句点 > 読点——という区切りの階層性を表現し，調整なくても崩さない。同様に，起しつの（始め）カッコ類は細いものに換える（然もり）カッコ類の直後のアキは等分じにする。

(8) **行頭一字孤立および頁頭一行孤立の回避**

行頭の一字孤立は、一行の字詰めがある程度以上ある場合は，調整して回避する。

(9) **ルビ文字の配置にルビをかけが一貫しているか**

中付きが一般的であるが，親文字間のアキ調整がなくてもそれ付きが研究されてよい。原稿整理時にキノイビタケルアルファルを識別しておく。

(10) **画像ごの位置関係および回り込みの方式が一貫しているか**

回り込み部分の設計では，本文の字送りを一貫させることが優先である。回り込みのこいろだけ字送りばらばらくのはまるっとしないく。まだ図版に対してキャプションのサイズ，体裁，およびの図版とのアキ幅はパロトレいこと。

◆見出しなど

(1) **文字サイズ、書体、行取り幅が文の階層性に適っているか**

デザイン（本文ナミ字に対して違いを立てること）は最小限に絞り込み、サイズもウェイトもフォントも変えるなどという「厚化粧」はしないこと。また、行取りは本文の整数行の取り幅を基本に設計し施工する。

(2) **中見出し・小見出しの見開き末および偶数頁末の調整**

本文の(8)関連。見出しの後に本文が1行は入るようにするのが基本であり、見開き末（奇数頁末）は中見出し・小見出しで終わらないようにする。しかし、偶数頁末の見出しだけというのは許容する場合もある。

(3) **仮名プロポーショナルの調整**

書体デザインは本文組版を前提に設計されたものであり、見出しにその文字を使うときには

- 小書きの仮名はさらに小さくする（ウェイトは太くして見かけでソロエル）
- 音引きは短くする（語末の場合はママとする場合もある）
- 句読点やカッコ類は細いものに換える
- 正方形の枠にとらわれず、字の形でアキを詰める

——などの調整を加えます。

※感覚をつかんでいくためには、戸田先生の『陰影論』および『紙手水本』で同様類似の箇所を探し出して、どのような処理がなされているかを実測して確認、比較して研究してみること。

組版とはビートを刻むことであり、豊かなリリックやメロディを載せる大地である

流れるように読みやすく、また手に取ったときに美しい紙面をこしらえるためには、クラウド（共有資産）になった、長い年月の経験の蓄積を参照する必要がある。この歴史的な視点なく、恣意的な「ルール破り」をしようとしても歴史に復讐されるだけだろう。

文字と言葉は、伝達であると同時に表現であり、他方では同時代を超える試みへの衝動もまた必然である。ここからつけ加えられるべき新たな組版ルールもすすんでいくだろう。

そこで最も必要なことは、今日にいたる組版の歴史に対する基本的な知識と「伝達と表現」という文字と言葉のもつ役割に対する理解、バランス感覚なのである。

前期〈組版・タイポグラフィ論〉第11・12回　20170617

組版設計のポイントと最終課題

前田年昭 t-mae@kobe-du.ac.jp

文字と組版のないデザインはありません。同時にまた「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」（周易繫辞傳）ということも真実です。文字は決して〝流し込む〟ものではなく、表現と伝達の動機、初期衝動に支えられてこそ、相手の気持ちに触れることができるのです。

よい組版は、適切な版面設計と組み方、書体選択という三つの要件に支えられて成立します。ここまで学んだように、具体的なさまざまな条件を考慮することなく、さまざまな具体的なちがいを超えた絶対的に正しいルールなどなく、ルールは（歴史に学んだうえで）自分で組み立てていくことが必要です。

組版の力とは、自分で臨機応変にルールを組み、ルールを組みかえ、組み直していくことのできるために必要な知識であり、決断する確信です。そのために、よい組版を見る目、感じる心を養っていってほしいと思います。